



コルネリオ会

(防衛関係キリスト者の会)

ニュースレターNo. 128

2011年12月



第11回 台湾国家祈祷早餐会 に参加して

コルネリオ会 会長 今市 宗雄

○ 全般

1911（明治44）年10月10日に蜂起した孫文による辛亥革命から100年を迎えた今年10月15日の台北水泳アリーナ会場は、5千名を超すであろうクリスチャンで熱気に終始溢れていました。

大会の進行は、Thy kingdom come（御国が来ますように。マタイ6：10）のテーマに沿い、10数名の牧師が楽団による賛美を伴い福音宣教を元氣強く鼓舞するものでした。

○ 特異点

会の前半に、信徒である馬英九総統が祝辞を述べられた中で東日本震災に触れられたことは、日本から一人でも来て良かったと感謝する次第でした。

○ 関連事項

1 台北栄光教会での日曜礼拝

雰囲気は予想通り前大会のミニスタイルで、説教は“今日の中に即実行”を強調されるものでした。新来者が10名位紹介されていました。また、その後の牧師との談話で中華人民共和国への宣教についても十分な配慮を窺い知りました。

2 同教会での討議では、日本からは震災への献金の謝礼、自衛隊の献身的な働きへの国民からの信頼、コルネリオ会が主に用いられる祈願、弱小MCF国への援助等を提起しました。なお、韓国はMCF、台湾は宣教一般の各活躍の現況をCDで映写紹介していました。よって、さしたる質疑は、ありませんでした。

3 台湾MCF月例会への参加

一口に言って、会員が大変に高齢化されています。会員数は約200名で通常例会には15名位が参加するそうで、私たちが少なさを嘆いてばかりでは居れないと励まされる思いを持ちました。台湾の信徒数は、人口の約6%だそうです。

なお、前東アジアMCF会長雷兄からくれぐれも皆様に宜しくとのことでした。

4 故宮館を訪ねて

象牙細工の緻密さと大きさには驚きましたが、ここ100年来の外交文書類の展示は、事実のみで日本への非難等他の所見・説明が見当たらないのが印象的でした。

○ 結言

東アジア会長リー兄以下12名の韓国チームと起居を共にし、台湾を交え主にある兄弟姉妹であることの喜びが体験出来て感謝な三泊四日の旅でした。

○ 付言

1 来年の台湾でのInteractionは、高雄で予定されています。

2 2014年の世界大会は、南アフリカ共和国での開催を計画中だそうです。

以上

イスラエルの旅

会員 中村 誠一

1 はじめに

コルネリオ会の皆さん、初めまして。空自OBの中村と申します。兵器管制官（GCIO）として勤務しましたが6年前に退官し、今は都内で日本語教師をしています。今年の9月から新宿の集会でお世話になっています。昨年年末から新年をはさんで念願のイスラエル旅行をする機会がありましたので、ご挨拶を兼ねて投稿します。

今、私が礼拝に参加している教会は、新大久保にある韓国系の教会です。今回、弟子訓練の一環としてイスラエル宣教に行くことになりました。昨年12月下旬の朝9時過ぎに成田を出発し、韓国のインチョンで直行便に乗り換えました。韓国のクリスチャンは聖地巡礼に行く人が多く、航空会社もテルアビブ空港までの直行便を運行しています。何と12時間10分のフライトでした。

2 行動概要

到着したのは12月28日、夜の10時過ぎでした。途中真っ暗で何も見えない中、遠くの「ティベリアス」の街燈の明かりが私達を歓迎してくれました。現地在住11年の韓国人聖書学者（宗教博士兼牧師）がアラブ人のバス運転手と待っていてくれました。さらに1時間半かけ、ガリラヤ湖畔の東側にある「エン・ギブ」の宿舎まで行きました。総勢25名のうち日本人は私一人。若い人たちが入れ替わり立ち代り私の横に座って韓国語の日本語通訳をしてくれました。

初日（12月29日）はガリラヤ湖東岸沿いに、遠くにヘルモン山を臨む道を北上しました。国連PKO部隊の駐屯地を遠くに見ながらさらに北上し、「ダン」の遺跡（北王国）や「バニアスの滝」、豊かな水源のある「ピリポカイザリア」、「カペナウム」へ。「山上の垂訓教会」を経て夕方「ティベリアス」の港から観光船に乗り、約1時間半で宿舎に戻りました。船上での夜の賛美は忘れられません。

二日目（12月30日）はガリラヤ湖周辺地域へ。雨の中、「ヨルダン川」でイエス様が洗礼を受けた場所を見た後、「カナ」、「ナザレ」の町、そして「メギ

ド」へ。「カルメル山」のエリア記念教会を経て海辺（地中海）の街「カイザリア」へ。「コルネリオ」ゆかりの地ですが、私はまだ「コルネリオ会」のことを知りませんでした。

三日目（12月31日）は早朝にエルサレム市内を一望する丘で黄金のドームを複雑な気持ちで眺めました。エルサレム誕生の場所「ダビデ城」の遺跡を見た後で「ヒゼキア水道」へ。圧巻でした。人間が一人くらい立ちながら通れるような幅1m弱の狭い岩肌の水路を、20人くらいが1列になって約30分くらい歩く（533m）のです。水深は50センチ程度で深いところは腰あたりまでありました。水は小川のように流れています。照明は無く、携帯用の小さなライトが手渡されるだけです。閉所恐怖症のような方は入らないほうが無難です。「オリーブ山」、「ゲッセマネの丘」、その後、雨の中を両脇にアラブ人が店を出している幅3~4メートル程度の商店街の狭い道、イエス様が十字架を背負って歩いたという「ヴィア・ドロロサ」を涙を流しながら歩きました。聖書に記されているイエス様の受難の場所に説明立て札がありました。「第1地点：ピラト法廷が開かれた場所」、「第7地点：イエス様が2度目に崩れた場所」等々、8箇所ありました。夜になると土砂降りの雨の中を「嘆きの壁」へ。大勢の人の中で、ずぶぬれになって祈ることが出来ました。夜11時過ぎに韓国の教会に招かれ、新年の祈りに参加しました。賛美歌を歌ったり、若い人たちはブレイクダンスや演劇を披露しました。

四日目（1月1日）は昼前から市内にある「イスラエル歴史博物館」へ行きましたが、山口県の10名程度の団体さんとお会いし、双方ともびっくり！ここで日本人に会えるなんて思ってもいませんでした。「ホロコースト記念館」ではユダヤ人迫害の写真や物品に涙を禁じえませんでした。夕方には宣教の目的のひとつである「メシヤニック・ジュー」の信徒の教会で活動をしました。ロシアから移住した人やエチオピアからの移住者（れっきとしたユダヤ人で黒人の方）が多いのには驚かされました。教会の周辺では、ユダヤ教

徒からの妨害活動が年に数回あるとのことでした。

五日目（1月2日）は「アラド」に行きました。オリーブが繁る小高い丘の上から「ダビデとゴリアテ」の決闘舞台を眺めましたが、韓国の牧師、信者はいたるところで熱心に祈りを捧げます。ギターひとつで賛美歌を歌います。私は日本人信者として静かに祈りました。4時半過ぎに「ベール・シェバ」に到着しましたが、既に門が閉ざされていました。ガイドの牧師は「こういうことは何回も経験している」と言い、私達は門を乗り越えて中に入りました。夕日が沈む中を、貨物列車がゆっくりと砂漠の中を進んで行きました。井戸の遺跡があり、小石を落とすと4秒前後で音がします。70m程度の深さがあるのでしょうか。夜は「エリコ」の街に行きましたが、暗くて城壁などは見ることが出来ませんでした。

六日目（1月3日）は死海方面まで南下し、クムラン遺跡、マサダ砦、ダビデが隠れた洞窟・エンゲディ、そして死海で実際に泳ぎました。ただ浮かんでいただけなのですが、読書が出来るほどの不思議な浮力を体験しました。腰までの深さの海底から泥を取り、全身に塗りましたが、化粧品としても売っているほどの「商品」が無尽蔵にありました。泳いだときは少し肌寒い感じがしました。イスラエル最後の夜は、海岸にある「ヨッパ」のホテルに宿泊しました。

3 感じたこと

30年以上にわたり、自衛官として生活したのですから当たり前なのでしょうが、見ることも聞くことすべてに「聖書」よりも「軍事的側面」で考えている自分を発見し、苦笑しました。ガリラヤ湖畔東岸を北上したときのことで、バスの停留所が分厚いコンクリートで造られ、「銃撃戦からの避難所」の様相をしているのです。これはエルサレム市街地にも多く見られました。多くの人種と多くの宗教がこの狭いエルサレム地域に集中しているのです。海外旅行者に人気のある「簡易保険」に関しても、エルサレムから周辺30km以内は適応除外です。テロ事件やロケット弾が飛来したら、などと考えずにはいられませんでした。

国連PKO部隊の駐屯地を見下ろせる休憩所のすぐそばに小さな山があるのですが、そこには通信用アンテナがたくさんありました。しかし、不思議に思え

たのは「対空レーダー」を見つけることが一度も出来なかったことです。日本のようにレーダーサイトが丸見えの状態の方がおかしいのでしょうか・・・。ゴラン高原の横を通ったときには、この上空で大空中戦が行われ、西側兵器の優越性が確認されたのか、とG C I Oとしての勤務当時に思い起こしました。カルメル山の「エリア記念館」の上空をジェット戦闘機が1機飛んでいきましたが、外国で初めて聞く戦闘機の爆音で「クフイル（ニックネーム）か？」と見上げました。そのふもとに空軍の飛行場がありましたが、滑走路が一本の小さな基地で、看板も何も見ることが出来ませんでした。古戦場を見ても、この場所ならこっちに陣を敷いたほうが有利だとか、迂回路は、水や食料はどうして調達したのかとか、馬や槍が常套手段の時代の連絡手段には「狼煙」が有効だったのでは、などと想像力をたくましくしました。死海周辺には「はげ山」と「砂漠」が連なり、ごつごつした火山性の岩肌は農業には不向きです。

中でも今回の旅行で私の心に強く残った場所は（聖書には書いてありませんが）「マサダ砦」でした。ローマ帝国に反逆し、約1年にわたりユダヤ人が立てこもった玉砕地です。山頂にはケーブルカーで登りましたが、ローマ軍が砦の攻略のためにユダヤ人捕虜に作らせた登坂道路や、雨水を効率よく溜め込む水道施設などがありました。ここで約千人の人が「自国を守るために命をかけた」のかと思うと、涙が止まらずに困りました。「ノーモア・マサダ」とイスラエル陸軍の入隊式典で叫ばれる意味が痛切に感じられ、国旗に対し「個癖あふれる敬礼」をしてきました。

4 最後に

聖地イスラエルへの旅行には種々の考え方があることは理解しています。聖書を信じ、キリスト者になったからには一度はイエス様の歩いた場所を自分の足で歩いてみたいとの素朴な感情から行ってきました。聖書に書かれている場所を実際に歩いてみることで、自分の中の聖書に対する愛着が強く、さらに強くなりました。

現役時代にはコルネリオ会のことを知らず、私にとって初めての集会（9月・新宿）で「元自衛官が祈っている姿に驚いてしまった」のですが、今市会

長の話し方に徐々に「自衛隊」の雰囲気を感じ、嬉しくなりました。機会がありましたら（今度こそ）、陸、海、空の垣根を越えてお会いできればと思っています。よろしくご指導下さい。そして、皆様お元気で過ごして下さい。



カイザリア風景



マサダ砦



ヨルダン川

黙想と祈り（その1）

会員 長濱 貴志

街路樹の木々が11月になって緑から茶色、茶色から橙、橙から紅へと変わり、そして色付いた葉が散り始めています。秋の深まるこの季節は、歩くのが楽しい季節です。

先日の礼拝後教会で、「黙想と祈りの手引き」（加藤常昭著）のタイトルが目にとまりました。本を開き、第2部 黙想への勧めから早速読み始めました。

黙想の手段として、①自然との対話、②散策しながらの黙想、③芸術作品（絵画、彫刻、音楽）との対話、④書物との対話、⑤信仰の仲間との対話が紹介されていました。

黙想とは何か、黙想による効果は何か、自分が日頃公園を散策していることは、著者のいうところに当てはまるのか。色々疑問が湧いてきました。

結論から言えば、私の想像以上の深さ、広さ、主イエス・キリストとのことを紹介されておられました。

○ 黙想とは何か。

どうも、祈りとは違うようです。黙想とは、み言葉から聴く姿勢を整えて、神との対話を楽しむものでした。

ポイントは、み言葉に始まり、み言葉に終わること。一人での黙想は、聖書の言葉を何度も読むことから始まる。というものでした。

姿勢としては、祈りの様に、我が祈りを神に捧げること、懇願すること、期待すること、求めることよりも、聞くこと。頭の中を空っぽにして、聖書の言葉に対する主からの語りかけが与えられるまで待つことが重要とのことでした。

そして黙想の効果として、黙想での神との対話が祈りや説教につながっていくとのことでした。

カール・バルトという高名な神学者の息子さんが父上が黙想を大切にし、実践されていたというのです。そして、次のような「祈り」という文章をその息子さんマルクス・バルト氏が著者に送られたそうです。

「わたしに耳を傾ける人にとって、わたしの言葉はその人の言葉より重い。

わたしに信頼を寄せる人によって、わたしの企ては、その人自身の計画より重い。

わたしに望みを寄せる人にとって、わたしの子イエスは最上の同伴者であり続ける。

わたしに忠実であり続ける人に、わたしは常に悔い改めを教える霊を送る。」

ご息マルクス・バルト氏は、「わたし」である神に祈ることをやめてしまって、「わたし」と言って語りかけておられる神の言葉を聞き続けておられるのです。これは、父カールバルトが聞き続けていた言葉だと言うのです。「わたしに耳を傾ける人」というのは、父上カールバルトです。

教室で、教会堂で語り、ある時クリスマスには、バーゼルの刑務所でも語った優れた神学者は、その強い神への信頼の中、黙って、神の言葉を聴いていました。

今回は、ここまでの紹介とさせていただきます。次回は、具体的な黙想の例、取り扱うみ言葉の例、黙想の楽しみ方等を紹介したいと思います。

（次回に続く）